

パイオニア精神の継承と新時代の登山のあり方

2006年5月13日の総会において会長を拝命したが、会長就任にあたり、会の運営の基本方針として次の二つを掲げた。

1. パイオニア精神の継承

- * 台湾、パタゴニアに始まる南米遠征、そしてアラスカからヒマラヤへと発展していった遠征に見られる未知の探求と困難への挑戦
- * そして遠征を通じて若い世代を育成

2. 新時代の登山のありかたの模索

- * 処女峰に登りつくされつつある今日における会としての新たなビジョン
- * 若い世代の積極的な参画による新しい活動スタイルの揺籃

新時代へ向かってアクセルを踏むべく、2006年11月18日には「神戸大学ヒマラヤへの挑戦 ～Sherpi Kangri 30周年、Kula Kangri 20周年 記念パーティ～」を実施した。このリユニオン・パーティから新しいムーブメントが起きて来ることにを期待している。「パイオニア精神の継承」については「Ruoni 峰を含む Ata 氷河の最高峰への再挑戦」を目標に、2007年現在、再度偵察隊を派遣する運びとなった。計画している。崗日嘎布山群(カンリガルポ Kangri Garpo)は未知の地域であり、6000m 峰が約 30 座存在し、しかもまだ一つのピークも登頂されていない。新時代に相応しいコンセプトを意識して組織化し、2008年以降この地域に継続的に登山隊を派遣できるような体制構築が会の課題ととらえている。「パイオニア精神の継承」については神戸大学らしい価値ある遠征を実現することはがその一つの答えを出すことでもあると考えている。「新時代の登山のありかたの模索」は、謂わば、新しい時代の登山精神の開発でもあり、長期的に取り組んでいくべきものである。新旧会員の交流を活発にし、討議や登山の実践を通じて構築して行かねばならない。

社会の変遷と登山スタイルの変化

さて、昨今の日本の登山界に目を向けてみよう。日本アルプスの人気地域や日本百名山、二百名山、そして最近では日本三百名山なども選出され案内書もあり登山の大衆化に拍車を掛けている。有名な山々の無雪期はファッション性豊かな装備、服装の登山者であふれている。山小屋は立派なホテルのように整備され、縦走は軽装備で手軽に出来るようになった。登山が他のスポーツと同様にビジネスの対象となり、用具や服装を楽しむことに喜びを見出す傾向を止めようとしても無理なことである。2007年8月、中国地質大学の一行と黒部源流で合宿を行ったが、薬師沢の小屋は釣師と赤木沢を遡行するパーティの登山基地となっていた。早朝、ヘルメットとハーネスに身を固めカラビナをジャラジャラ鳴らしながら小屋から出発するクライマー達に違和感を持ったのは私だけだろうか。我々は赤木沢出合の下流で川原にてキャンプし、地下足袋に草鞋姿であった。彼らから私たちを見たほうが時代錯誤であったのかもしれない

い。太郎平から薬師沢出合までの登山道は半分以上が木道化していた。40年前に比べると黒部源流も深山幽谷とは言い難い。しかし、一步源流域に入ると太古から変わらぬ大自然に包まれていたことには心が慰められた。

もう一つの現象は、少子高齢化の傾向に拍車を掛けるように登山人口の変移が見られることだ。中高年の登山者、特に女性の増加が顕著である。若い頃に登山を経験した人達がシニアになって再開した層も多いと思われるが、中高年になって初めて登山を始めた人々が輪をかけて多くあると見受けられる。所謂ポピュラリティが浸透しつつあるが、若い世代が極端に少ないのが気になる。今夏の薬師沢ではすれ違った数多くの中に数人の若い女性のパーティにたった一組あったのだが、妙になまめかしくどぎまぎした次第だ。

Wilderness に注目しよう

文明化の進展と登山の歴史を振り返って見よう。黒部溪谷の電源開発、奥美濃の徳山ダム、氷ノ山、瀬川山のスーパー林道、など、日本は人口密度が高いので列島の隅から隅まで開発して生活に利用しようとする傾向は強い。しかし、近年、生活が豊かになるに連れて自然保護の機運も高まり開発にブレーキが掛かりだしている。世界遺産として自然を残そうとするのもそのような社会の機運であろう。

米国では早くから開発が自然破壊を引き起こし、壊滅的なダメージを各地に残した後にその反動か、極端な自然保護の運動が巻き起こっている。クリーン登山などもその一つである。レニア山に登るには Human Waste(屎尿) を持ち帰る準備をしてかからねばならない。National Park(国立公園)は沢山の人々が訪れるので規制も厳しい。公園内のキャンプ場で側の清流で米を研いたらそれは違反だと言う。しかし、遊歩道は整備され案内板や休憩所もたっぴり設けられている。人工と自然を合体させたのが国立公園だと私は解釈している。これに対して Wilderness がある。こちらは指定したエリア全体を自然のままにしようと言う考えだ。指定地域に道路も作らない。登山道は指定地に入ったところで無くなる。Scramble で歩きなさい、ということ。道標も設置しないし、ガレ場にペンキで印をつけるようなこともしない。Mechanical Vehicle(4輪駆動車、バギー車、スノーモービルなど)の進入も禁止だ。但し、この地域での生活には私たちにとっては受け入れやすいルールがある。テントサイトはないが、水流から一定距離離れてテントを設営しなさいとか、Human Waste は 10cm ぐらい掘って埋めよ、などと細かく生活のルールを決めてトレッカーや登山者の入山を受け入れている。キャンプ場が Wilderness の境界線に多数設置されていてそこでは盛大なキャンプ・ファイヤーも出来る。駐車場やトイレも完備している。アラスカやロッキー山脈のワイオミング州にはこうした Wilderness が広範囲に広がっていて一步その地域に入るとまったくの自然が楽しめるのだ。アメリカは文明国だからと思っていたが、Windriver Range(Wyoming 州)の 4000m 峰はアプローチも 2~3 日必要で岩と氷のピークが多数存在している。現役の合宿に最適だと思う。

中国では 2006 年のチベット鉄道開通でラサを中心に急速に観光地化が進みだしたが、これからさらに開発が加速するであろう。自然破壊を尽くした結果として反省の見られる米国や日本を反面教師とし、どこかに結界を設け、国立公園化するものと Wilderness として残すものを

区分けして開発を進めてほしいものだ。幸い、チベットは広大な地域だ。そう簡単に Expedition 時代が終わるとは考えられないが、Wilderness として残されれば私たちの継承すべき登山活動が末永く続けられる地域と考えている。神戸大学が探検隊を送り込んだ北部パタゴニアを調べて見れば分かることだが、いまだに Cerro Arenales は第二登されていない。周辺にはまだまだ魅力ある対象が多くある。この地域は意図的ではないが自然環境が Wilderness を残している。

国の発展と登山の盛衰

登山が発展する過程と衰退する過程に着目してみよう。国に活力が有るときは一般的にスポーツが発達する。登山もそのような傾向にあると言える。昨今の韓国や中国の登山熱を見るとその傾向が顕著である。マスコミが注目し、ヒーローが生まれる。功名心に下支えされたモチベーションにより多くのヒマラヤ登山が実行されている。賛否両論があるだろうが、2008年の北京オリンピックの聖火はチョモランマの頂上まで持ち上げられる計画だ。2007年の予行演習は成功裏に終わった。本番では三桁の登山者が国の威信に掛けて聖火リレーを成功させるであろう。中国では8000m 峰を中心に有名な山の頂上に立つのが登山家の目標となっている。2007年はチベットで組織された中国の登山隊の3人が14年の歳月をかけて世界の8000m 峰14座すべてに登頂している。14座の制覇者は世界にこれまで13名いる。未知だとか初登頂という価値観から生まれる登山はまだ先のことであろう。

日本の登山界はそのようなブームの去った後の退廃期にあるのではなかろうか。パイオニア・ワークだとか、処女峰への挑戦と言った価値観はマスコミ受けしなくなった。ましてやそれを旗印に資金調達しようということは時代錯誤となった。成熟社会になった現在において安心と安全をよとする社会風潮は登山とは遠い対極にある。したがってベテランは自分たちの残された人生を楽しむことに注力し、若者に夢を託すことはしなくなった。若い世代も極めて個人的な欲求を満たすことに登山の目的があるようだ。また、ごく限られた人たちが登山に人生のすべてをかけて極限登山を試みている。少数のクライマーが耐乏生活に耐えたラッシュ形式でアタックするものだ。最近話題になった山野井夫妻のギャチュンカン北壁の登攀(「凍」 沢木耕太郎著:新潮社 参照)はその究極にある。多くの精鋭クライマー達は比較的アプローチの簡単な地域の鋭峰やバリエーション・ルートまたは冬季登攀などより困難を目指している。

個人主義社会と登山観

世代を超えた共通の夢が求められない環境ではますます世代間のギャップは深まることであろう。この現状は放置しているとますます登山の衰退を招く。そして、過去の栄光を振りかざして若いものを指導しようとしても意欲を引き出すことは極めて難しい。

最近、現役と山行を共にした。中国地質大学の一行との合同合宿のことである。中国との合同登山を実施するにあたり問題となる文化や生活心情、登山方法などの違いの理解とコミュニケーションの円滑化を目的とした日中友好合同合宿のつもりであった。ところが、もうひとつ

山岳会としてはシニアと現役の世代間ギャップという潜在課題に山行中に気づいたのでいくつかの例を紹介したい。

まず、行動食は各自が自分の嗜好に合わせて勝手に持参するのが今流であるとのこと。彼らにとっては山岳部の伝統的方式であって大先輩も当然知っているものとの暗黙の了解であったのであろう。シニア組の山田健君と私は非常食で食いつなぐというひもじい思いを強いられた。つぎに登攀道具である。ハーネス(安全ベルト)は個人装備であるということは理解できる。しかし、登攀に必要なカラビナ、ハーケン、シュリングも各自が個人装備として持参するものと言う考え方は私にはなかった。私たちの世代は合宿に参加するとたいいていのものはそろっていて楽に安く山に行けるから山岳部に所属することはありがたいと思っていた。今の世代は我々貧しい時代とは違う世代であると改めて思い知らされた。社会背景が登山にも多くの影響を及ぼす良い例ではないだろうか。確かに、装備や食料を基本的に個人のプロパティとしてそちらのウェイトを高めるとパーティを構成するときの共同装備や食料の手配は簡単になる。沢に入って気づいたのだが、ルート・ファインディングも各個バラバラである。滝の右岸に取り付くもの、ジャブジャブと水中をたどるものと比較的簡単な沢であったから特に文句を言うこともなく放置しておいたが、私たちの時代の現役合宿であったら怖い先輩に徹底的に注意されたであろう。トップの責務はパーティの実力にあった。ルートを探して後続に気配りしながら進む。時にはリーダーに確認を怠らない、ということ常を心に心がけなければならなかった。いわば集団主義が徹底していたということであろうか。しかし、60 歳になる私を残してどんどん先に進んでいくのはちょっと感心しないと思った。スキー滑降のときに顕著に現れるリスクであるが、パーティがバラバラになって歩くと何かあった時の対応が遅れて思わぬ結果に陥ることが多い。これらについてまったくコメントしないのは彼らに失礼かと思って、リスクな登山だね、と一言感想を述べさせてもらった。ほかにも気になることがあったが、またの機会に現役の山岳部員たちと氷ノ山ヒュッテでストーブを囲んで話し合うこととしたい。パーティを組んで山に行くのはなぜか、という問いを改めて思い出す経験であった。

個人主義の上に成り立つ登山形式は米国では一般的であるが、個人主義的スタイルは私たちの時代にも社会人山岳会に顕著に見られた。「山行は自己の目的を満たすために相手を活用する」、という理由でパーティを組むのだと、私の小学校の同級生で社会人山岳会に所属し、屏風岩の東壁スラブの初登攀をした N 君が言っていた。何度かいっしょに岩登山に行ったが、自分ひとりで登れるような場所ではザイルを結ぼうとしなかった。「落ちるならどうぞ勝手に」という感じで私にとっては違和感が強かった。彼らの世界では相手を一人前のクライマーとして尊重しあうというのがマナーであったようだ。ところが我々山岳部の学生は、登山学校方式として訓練された時代があったように、発展途上の登山家の卵として扱われていた。団体主義的な側面が強かったわけである。立派な登山家、Mountaineer になることを理想とし、やがてはヒマラヤ遠征に参加できるような技量を身につけたいと多くの部員が思っていた時代でもあった。登山スタイルが多様化した現在、大学山岳部の部員も様々な考え方を持っていると思う。それらを全て受け入れていくには部員数が少なすぎるのだが。

本筋がオールラウンドなマウテニア志向とするならば、4 年間で一人前の登山家になることは無理であろうから、やはり卒業後も登山を続けて海外遠征にも参加し経験を積んでいかね

ばならない。すばらしい登山家として、また社会人としても一人前になって社会に貢献できる人材が育つことが大学山岳部・山岳会のミッションであり、今後もその原点は変わらないと考えている。それには卒業生の集まりである山岳会が隆盛であり続けることが必要条件だと思う。

次世代を育てる

さて、山岳会の永続には会員の継続的加入が必要だが、その供給源である山岳部の発展が欠かせない。現在 9 名の現役部員が存在するということだが、年齢構成を見ると高学年や大学院生などに偏っている。また、山岳部での活動の姿勢もまちまちである。現役時代に思い切り山に登って、就職したら仕事一筋と覚悟している者、遠征などヘビーな登山はしたくないものなど実際にそれぞれの部員と話してみると多種多様な取り組み姿勢をもっている。そこで課題は下級生部員の獲得である。また、大学院に進学するものも若干名いるので彼らの今後の活躍と後輩の指導に期待したい。山岳会も現役との交流の場を数多く提供して将来所属していて楽しいソサエティであることを分ってもらわなければならない。米国に数年滞在して得たことであるが、スポーツは国を挙げて大切にしている。また、幼少時代からスポーツに親しめる社会インフラの充実はうらやましい限りだった。しかし、それ以上に感心したのは、「子供は将来のお客様」として徹底的に誘い込む社会全体の思想である。プライベートのゴルフクラブに入会すると奥さんも正会員としてプレーできるのはなるほどアメリカだと納得したのだが、24 歳以下の子供も会員として若干の制約はあるもののタダでプレーできるのはサプライズであった。なぜそうなのかの問いに対してユーモアを交えて先ほどの答えが返ってきた。日本の登山界では高齢化を嘆き、今の若い者は云々と批判する発言は多く見られるが若年層を対象に登山人口を育てる努力をどれだけしてきたであろうか。スキー人口の減少を見てもあきらかである。シニア料金でゆとりのある層を狙った動きはあるが、子供料金をタダとは言わないが格安にする発想はないであろう。目先の利益追求にやっきになっている貧しさが将来を危うくしていると思いませんか。日本山岳会がようやく気付いて小学生対象のイベントに協力し出したことは評価したい。

当面の課題として、海外遠征に参加できそうな若者の絶対数が少ないので他校との交流も視野に入れなければならない。次の遠征には協調精神のある他校の部員の参加を歓迎することも重要であろう。ここは一校で部員数の増加やイベントを企画してがんばるのではなく協力し合うのが得策ではないだろうか。多くの人たちにとって登山活動で得られた経験や先輩たちから得たものは人生の大きな糧となっている。学生は将来の日本を担っていく。このような価値ある伝統は登山を取り巻く環境が変化し、登山対象や方法、登山思想の変遷があっても決して色あせることはない。

毎年 2 月、金井良碩さんが幹事となって例会山行を氷ノ山ヒュッテで開催している。現役からシニアまで広い世代の会員が参加しているのがうれしい。ストーブを囲んでの話題は尽きないが、ぜひとも今後の登山のあり方についても議論していただきたいものだ。また、黒部合宿で現役のお世話になったのだが、今後も新旧合同登山が増えることを期待したい。

グローバルな活動に夢を持とう

そして、今一度世界の山々に注目し、研究対象の山を見つけてグローバルに登山を展開してゆくような神戸大学山岳部・山岳会になっていくことを夢としたい。中国地質大学との交流は国際化した社会で活躍しなければならない次の世代にとっても有意義な経験を積むことになろう。合同登山は歴史的に見ても神戸大学の得意とするところでもある。「同じ釜の飯を食った仲間」という言い方があるが、今夏の中国地質大学の一行との黒部合宿はそれを実践できたと信じている。コミュニケーションや協調、パーティシップに心配がある、という意見もあろうが、新しい時代に向けて異文化を理解し共通の目標を設定し、達成に向けて困難を克服していくことは何事にも変えがたい人生の一コマとして”君”の心に燦然と輝くことであろう。

2007 年 9 月 30 日 井上 達男



写真説明

異文化交流はグローバル化の出発点(黒部源流合宿下山時、折立にて 2007 年 8 月 18 日)
前列左から 牛 董 岩澤 山田 井上 後列左から 趙 伊藤 石 山川 周